

仕事、幸せ、老舗

-複合語前分「し」および接頭辞「し-」とその意味的分析-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19143">http://hdl.handle.net/10291/19143</a>

## 仕事、幸せ、老舗

— 複合語前分「し」および接頭辞「し-」とその意味的分析 —

中 村 幸 一

「し」で始まる名詞、動詞は数多いが、その「し(-)」の意味は多様である。「す(する)√s-u(-r-u)」の連用形であることが最も多いが(し・とどく(為届)、し・あつむ(為集))、それが確かでないもの、接頭辞であるものも少なからず存在する。また、伝統的にそうではないが、実は「し-」で分節されるのが妥当と思われる語(「しがらむ(筈)=し・がらむ)、またその逆(「仕舞ふ=しま・ふ)もあり、それらは語源とも深く関わる議論となるであろう。本論ではこれらを意味によって分類することを試みたい<sup>1)</sup>。

### 1 「し」が「す(為)」の連用形=複合語である例

#### 1.1

最大の集団をなし、時代も上代から20世紀まで散在するが、上代で、明確に「す」の連用形であると解釈できる語はきわめて少ない：

道の中国つ御神は旅行きも為知らぬ君を恵みたまはな

(『萬葉集』17・3930)

「ししる」は「行って知る>経験する」意味であるから、明らかに「し」は「す(為)」である。最も新しい例では「し通し」((1972))、「し通す」

((1902))がある(二重丸括弧で『日本国語大辞典』第二版(以下、『大辞典』)における初出年代を示し、特筆しない限り鉤括弧内の定義もこの辞典からひく)。これらの語は、「し」が、「す(為)」の連用形由来であるという透明性を保持しているままである。さらにこういう複合動詞をあげれば、「為侘ぶ」((c947-957))、「為外す」((c970-999))、「為暮らす」((c1059))、「仕返す」((1170))、「仕抜く」((c1439))、「仕上ぐ」((1475))、「為果たす」((16c))、「為倦む」((17c))、「為枯らす」((c1711))、「為負かす」((1768))。

複合名詞としては、「仕業」((720))、「為様(しざま)」((c970-999))、「仕事」((1209))、動作主名詞の「仕手」((1376))、「仕上げ」((1474))、「仕方」((1477))、「仕返し」((c1500))、「仕抜き」((1803))、「仕勝手」((1927))。

これらの多くは、「し」が「やり」と交換可能であり、そういう語は存在しないとしても、語感的に意味がとおることが多い。たとえば、「仕抜く」は「やり抜く」とほぼ同じである。「仕方」は「やり方」、「しづま」は「(?)やりづま」となるが、後者は語彙としては存在しないかもしれない(方言には存在する可能性もある)。しかし仮に使ったとしても意味が通じるレベルである。また、「仕手」→「やり手」など、意味が劇的に変化する場合はあるのは興味深いところである。

## 1.2

### 1.2.1 「し」=「作る」

「す」には、元来「作る」という意味もある：

神南備の神依板にする杉の思ひも過ぎず恋のしげきに

(『萬葉集』9・1773)

「しくはす」((1603-4))は「ものをかみあうように作る」である。「くは

す」の初出は((室町末-近世初))であるが、非使役形「食ふ」の原義から転じた意味、「しっかりと間にはさむ」の意味の初出は早く、((1124-27))となっている<sup>2)</sup>。

「数多く作りなす、数多く作って集める」のが「為集む」((c1001-14))であるから、この「し」も「作る」意味である。「為出づ」((c970-999)) (「作り出す」)、「仕上ぐ」((c1475)) (名詞「仕上げ」((1870-71))) も同様。

### 1.2.2 「し」=「競う」

「仕勝つ」((1477))は「他と争って勝つ」で、名詞形「仕勝ち」((1477))は「競い合って勝つこと」であるので、「す」の原義にはない、かなり変化した意味を担ったことになるであろう。あるいは、後述2.2.1「強意」に属し、その程度が烈しい例と考えることも可能である。

## 2 「し」が「す(為)」の連用形に由来すると思われるが、その意味が希薄になっているもの

### 2.1

「す(為)」の意味が希薄になり、わずかに語感として感じとれるけれども、前項1ほどではなく、意味的にも、「し」がない場合と大差ないものがある：「為飾る」((c1028-92))、「為添ふ」((11c 中))、「為設く」((11c 中))、「為箝(しすげ)る」((1468))、「仕拵(しこしらふ)」((1563))、「為転(しころばかす)」((1603-4))、「支払ふ」((1890))。

### 2.2

希薄になった語の中には、「す」の意味は微弱だが、新たな意味やニュアンスを獲得していると解釈できる語が見受けられる。以下に分類する。

### 2.2.1 強 意

「為渡す」((c974))は、「垣などを端から端までずっと作り構える」なので、単に「渡す」のではなく、その程度が増している。「為定む」((1420))も「きちんと定める」なので、強意と分類できるであろう。

「為据う」((974))「大事にして、あるところに置く」も、大事にしてという意味が付加されている。

「しこぢらかす」((c1797))は「病気をこじらせる」だから、「こぢらす」とほぼ同じであるが、「し」によって、強意のニュアンスが付加されていると言えるだろう。語根は√kodiとなるが、「こぢく(拗)√kodi-k-u」((1711))「物事がうまく運ばないで、もつれる。こじれる。ねじける」や「こぢる(扶)√kodi-r-u」((1275))「すきまなどに物を入れてねじる」と同根と考えられる。すべて、捻れる感じ、スムーズでない感じを表出している。

### 2.2.2 一般化

「したたむ」((c970-999))の語源は『大辞典』に10種類あげられている。そして、「し・たたむ」、「した・たむ」と、分節の仕方も一つではない。最も古い意味は「整理する、用意する」である。本論では、「たたむ<sup>3)</sup>」((720))「紙や布などを折り返してきちんと重ねる」に「し」がついて「一般化」され、紙・布以外にも用いられるようになり、たたむだけではなくなった語とみたい。「した-たむ」と分節した場合、前分は「下」であろうが、後分「たむ」(溜、留、矯、撓)の意味を考えると、「したたむ」全体の意味とうまく調和しないように思われる。

### 2.2.3 効果の期待

「仕掛く」((c970-999))、「仕掛け」((1625))。前者、最古の意味は「息を吹きかけたり、水を浴びせたりする」である。((10c後))に「物を用意し

てそれを他の物にかける」の意味、((10c 終))に「相手に対して、こちらから働きかける」があるが、三者とも、なにか効果を期待して「かけ」ていると考えられる。「仕込み」((1656))、「仕込む」((17c 後))も同様であろう。

「仕組む」((c1666))、「仕組み」((1594))も、単に「組む」のではなく、効果が期待されている<sup>9)</sup>。

「仕合はす」((?1130))は「うまくはからってふさわしい状態になるようにする」。初出((c1028-92))の意味は「二つの物や事柄をぴったり合うようにする」であるから、ただ合わせるのではなく、利益を期待している。名詞「仕合はせ」は((?1489))「めぐり合わせ」である。はっきり「幸運」となったのは((室町末-近世初))<sup>9)</sup>。

「仕付く」の初出は、((c970-99))「し始める」の意味だが、名詞の初出((1462))は「ならわしとすること」となっている。これらは効果の期待とは言いがたいが、もう少し後代の意味「作り付けること((1548))、処罰すること((1590))、礼儀作法を身につけさせること((1592))」ではそうなっているとと言えるだろう。

「仕立つ」((10c 終))、「飾り付ける」、((c1001-14))「衣服を作り上げる」も効果の期待と言ってよいだろうが、一方、((c1001-14))「つくり上げる」では、まだ一般的な意味で、「効果」までには至っていない。

#### 2.2.4 特殊化

2.2.2 とは逆に特殊な意味をもつに至った語である。「仕送る」((1768))、「仕送り」((1693))は「江戸時代、大名や旗本・給人の勝手向賄入用を立て替えて支払う金」という、特殊な、いわば財政用語であった。現用の意味は((1809-13))からであるが、送るものは、相変わらず「金銭」に特化されたままである。

「仕出す」((1588))「料理などを注文に応じて調理して届けること」は、

料理にしか使わないので、かなり狭く特殊化されている。しかし、もともとは「しでかす」((1477))、「やり始める」((室町中))など、「す」の意味が強く、もっと透明度の高い意味であった。

「仕入れる」((c1028-92))「作って入れる」はもちろん、「しつける、教え込む」((c1490))も特殊とは言えないが、現義の「商人または製造業者が商品や原料を買い入れる」((1688))は、かなり特殊化している(名詞「仕入れ」の初出は((1647))「教え込むこと、訓練」)。

「仕似す」((c1400-02))、「仕似せ、老舗」((1688))。動詞の最初の意味は「似せてする」(『風姿花伝』)と、完全な透明性がある。そこからより透明性の低い「家業を絶やさず続ける」((1688))となっていく。名詞にはこの意味と、その周辺の意味「商売、経営をして信用を得ること」しかなく、非常に狭くなっている。

「為立つ」((10c 終))の初出の意味は他動詞「つくりあげる、仕立てる」と、透明感があるけれども、自動詞はかなり時代を下り((1477))、「育つ、成長する」、((1586))「病気などが回復する」であって、もっぱらポジティブな意味に限定されている。

「為選る」((c970-999))も、「最もよいものを選ぶ」と、「し」の力によって、単なる選択ではなくなっており、意味は狭まっているだろう。「最適化」ともいうべきニュアンスである。この「し」に「為(す)」の意味の残影を感じとるのはもはやむずかしい。

### 3 「し」が「す(為)」の連用形とは考えにくいもの=派生語 (「し-」)の例

#### 3.1 強 意

例えば、次歌はどうであろうか：

わが背子が来むと語りし夜は過ぎぬしゑやさらさらしこり来めやも

(『萬葉集』12・2870)

中西(1978-85)は武田祐吉などを踏襲し「為懲り」と解釈しているから、前分「し」は「す」の複合動詞の扱いである。しかし、本歌において「する」の意味が透けて見えるとは言えず、もっと混濁し、熟している(一方、「商じこり」(7・1264)の方は、はっきりした「す(為)」と解釈できる: 2.2.1「強意」であろう)。すると、「こり」が同じ語であると仮定すれば、本歌では、「し-こり」と接頭辞になり、「し」から「し-」へ文法化したことになるが、類例がなく、時期的にも早すぎる。つまり、意味的に「す(為)」ではない可能性が高いと思われる。この語について詳しくは澤瀉(1960: 210-11)に述べられている。阿蘇(2010: 616-17)は、し損なう意味の「しこる」の連用形と解釈する説と、「いばる・増長する」の意味にとる説をあげ、後者が「後代の例や現代の方言の例にかなっているとされる」と述べている。であるとすれば、「おごり高ぶる」の「ごり(<こり)」と同根( $\sqrt{\text{kör}}$ )ではないか(<\*o- $\sqrt{\text{kör}}$ -u、この語は『大辞典』によると「ほこる Fo- $\sqrt{\text{kör}}$ -u」と同根である)。たしかに「失敗して、しくじって来ない」というのは変である。つまり「商じこり」の「しこる」と、「しこり来めやも」の「しこる」は別の語ではないだろうか。「おごる」と意味は大差ないので、「強意」の「し-」と分類しておくことにする。

### 3.2 特殊化

「しがらみ(柵、籐)」。動詞「しがらむ」の初出は((c945))「からみつける」で、一般的な語であるが、それ以前、名詞としては「水流をせきとめるために、川の中に杭を打ち並べてその両側から柴や竹などをからみつけたもの」が初出((8c後))である。『大辞典』には語源が9種類あるが、「す」との合成語とみるものはない。「し(為)」と見ることもできなくはないと思



うが、大島 (1931: 230) 「シガラミ (箒) は、杵に竹などを緊かと絡みたる者なり」を援用し、接頭辞に分類しておきたい。ただし、意味は大島の言う「緊縮」かということ、そこまでの力は感じとることはできないと思われる。この「し-」は (接頭辞ではない) 2.2.4 と同じく、「特殊化」であろう。

「し-だる (垂)」 ((?9c 前-11c 中)) と「たる」 ((720))。後者にはすでに「下方」の意味がある。『大辞典』における「しだる」の用例は、柳など、すべて植物である。この「し-」は (植物への) 特殊化と考えられるが、次項「下方」の可能性もあると思われる。

### 3.3 下方・後方

「しづく (沈)」 ((7c 後-8c))。『大辞典』は「沈み着くの意」としているが、その根拠や類例は示されていない。この語は「水の底に沈んでいる。また、水底に沈んでいるものが見える」の意味である。これは「つく (漬)」 ((8c 後)) (「水にぬれる、ひたる」) に接頭辞「し-」がついた語ではないだろうか。つまり、 $si-\sqrt{duk-u}$  しづく <  $*si-\sqrt{tuk-u}$  である。

一方、『大辞典』において「沈む」には6種類の語源がある。その中には「シは下の意味を持ち、水の中に下る義 (大島正健)」に比較的妥当性があると思われる。語根、 $\sqrt{tuk}$ 、 $\sqrt{tum}$  はさらに、 $*\sqrt{tu}$  へ収斂する可能性もあると考えられるので、 $*\sqrt{tu}$  は明らかに水と関係がある。すると、水  $mi$  は単独で用いられず、「水底」、「垂水」など合成語の中に現れるから、 $*mi-\sqrt{tu} > mi-du$  が想定され、「水」( $mi-du$ ) じたいも複合語であろう。

大島 (1931: 271-72) に、「ツを水氣ある物に用ゐる諸語あり」として、唾、吐く、汁、艶、潰ゆるが提示されている。さらには、拡張辞の -k- と -m- の意味が問題になってくる ( $\sqrt{tu-k}$ 、 $\sqrt{tu-m}$ ) (「 $\sqrt{se-k-u}$  せく (急、塞、堰)」と「 $\sqrt{se-m-u}$  せむ (迫、逼、責)」の関係はどうであろうか)。(沖森 (2017: 55) は、-r-、-k-、-m- について、「知る、敷く、占む」を挙げ、「いずれも〈治める〉の意を共通にもつ」と述べている。

si-mö (下) と si-ta (下) は上代から使い分けられており、ここから√si を抽出するのに無理はない。『上代』によると、「し」は「下方、した」で、「垂ル、<sup>シダ</sup>下枝<sup>シツエ</sup>などの複合語の中にのみ認められる」とある。日本語に限らず、複合語、熟語には古形が化石のように残るものである。この「し」も独立して用いられないのであるから、「し-づく、し-づむ (沈)」の「接頭辞」になっていると見ることはできるであろう。

なお、この語根√tu(-k-)を含む、水に関わる語には他に、「みづく (水漬) ((720))」、「なづく (漬) ((c898-901))」、「しづく (雫、滴) ((c8c 後))」がある。「しづく (滴、雫)」の「し-」も「下方」の意味でよいだろう。

「したむ (漚、醜)」「漉して液をしたたらせる」((c898-901))、「しづくを垂らす」((c1050)) も、下への動きが明瞭である。-r- と -m- のペアという視点から考えると、「したる si-√ta-r-u」が想定されるが、『大辞典』によると、方言に「したたる」の意味の「したる」が数多くある (新潟佐渡、岐阜飛騨、島根、広島高田郡、徳島、香川小豆島、愛媛、熊本下益城郡等)。従って、si-√ta-m-u / si-√ta-r-u のペアの存在を考えることは可能であろう。すると、語根√taの意味が問題となってくるが、大島 (1931: 254) は「タル (垂) は、重みにてさがるなり」と述べ、「タ」を「充實」と解釈する。すると、「足る」などとも同根になる。

「しさる (退) ((c933)) と「さる (去) ((712))。『大辞典』の語源は2種類、シリサル (後去) と「シリサマラスの反」である。大島 (1931: 228) が「シリ (後) のシもシタ (下) のシと同根なり」というのは正しいだろう。ただし『大辞典』のように、「シリ>シ」へ短縮されたととらえるのではなく、si-mö、si-ta などの例から考えて、初めから si- だけであった (si-√sar-u) と推測される。「しぞく (退) ((c850)) と「そく (退) ((712)) も同様のペアであろう (語根√sok)。

### 3.4 ネガティヴ

$\sqrt{\text{kam}}$ 、 $\sqrt{\text{kab}}$ 、 $\sqrt{\text{kaF}}$  (醸、嚙、咬、嚼、被) は閉塞感の語根である (中村 (1994: 579-581))。「しかむ (嚙、蹙)」((1477))「顔や額にしわを寄せる」は  $\text{si-}\sqrt{\text{kam-u}}$  であろう。大島 (1931: 230) は「シに緊縮の義あり…縮みて顔に皺を生ずるをいふ」とするが、これは逆で、緊縮感を出しているのは「し」ではなく、「かむ」の方である。この場合の「し」は意味的に「ネガティヴ」である。重複動詞 (5 に後述) として、さらにもう一つ「し」がついたのが  $\text{si-z}\sqrt{\text{kam-u}}$  「しじかむ (蹙)」( $\text{<}\ast\text{ししかむ}$ ) ((10c 終)) 「ちぢまる。ちぢむ。ちぢかむ。」であろう<sup>6)</sup>。

「しぐひあふ」は萬葉に一回現れるだけである：

美麗しもの何処飽かじを尺度らが角のふくれにしぐひあひにけむ

(16・3821)

『大辞典』は「語義未詳。男女がくっつきあう、まじわるなどの意か」とし、『し』は「為(し)」であるとも、接頭辞で下の意味を強調し罵倒するものであるかともいわれる」とある。中西 (1978-85) は「『しぐる』(固まる。群がる)と同根の語か」。澤瀉 (1966: 114-5) は「『くひあふ』の意はわかるが、『し』の義がわからない…『ど』などと同じく、下の意味を強調し、罵倒する意をもつたものではなからうか」。伊藤 (1998: 449) は「同衾する、つるみ合う、の意か。卑猥な言葉らしい。いまだほかに例を見ない。」「くひあふ」は、結局「くふ」であるから、「 $\ast\text{し-ぐふ}$ 」が想定される。同じく語根  $\sqrt{\text{kuF}}$  を共有する「ま・ぐはふ  $\text{ma-}\sqrt{\text{guF-aF-u}} < \ast\text{ma-}\sqrt{\text{kuF-aF-u}}$  (交合する、交接する) は、反復・継続を表す  $\text{-aF-u}$  がついた形である。「 $\ast\text{しぐふ}$ 」  $\text{si-}\sqrt{\text{guF-u}} < \ast\text{si-}\sqrt{\text{kuF-u}}$  の「し-」は、歌意からみて、「し-かむ (蹙)」の「し-」と同じく、ネガティヴな意味合いをもつのは明らかである

う。

### 3.5 反 復

「しぶく（繁吹、重吹）」（(1603-4)）と「吹く」（(712)）の関係はどうだろうか。この両者を無関係であると考えことはむずかしい。大島（1931：230）には「シブクは、繁吹くにて、風の繁く吹きて水の散るを云ふ」とある。この「し」が「す（為）」とは考えにくいから、やはり接頭辞「し-」となるだろう。5節に後述する「しぎる」も「しきりに切る」であるから、反復、頻度の高さを表す接頭辞と思われる。

「しごく（扱）」（(1603-04)）と「こく（扱）」（(c898-901)）。前者は「細長い物を、手の中ににぎりしめたり指で強くはさんだりしたまま、その手や指を、こするように移動させる」で、後者は「細長い本体についているものを、手でこすったりして、むりに離し落とす」である（後者の語根母音は乙類（ $\sqrt{\text{kök-u}}$ ）。「しごく」には「こく」よりも激烈さ、反復感が感じられる。一回だけしごくということはあまりないだろう。一方、「こく」の語義にも反復感はなくはないが、次歌などをみると、おそらく一回だけのこともある：

……藤波の花なつかしみ引き攀<sup>よ</sup>じて袖に扱<sup>こ</sup>入<sup>き</sup>れつ染まば染むとも

（『萬葉集』19・4192）

したがって、この「し-」は反復と解釈してよいであろう。なお、堀井（1988：118）は、「シは締める意の接頭辞か」とし、大島（1931：230）も「接頭辞」とは言わないけれども、「緊縮の義」としている。「緊縮」か「反復」かはむずかしいところである。しかし、「こく」には、既に「緊縮」の意味が感じとれるので、「しぶく」の助けを借りて「反復」に分類しておく。

#### 4 「し」が語根の一部であるもの

「しまひ (仕舞)」((1471-81))、「しまふ」((1603))。「舞う」には、回転性の移動、動作以外の意味はなく、「しまふ」との意味がかけ離れすぎている。これまでみてきたように、「し(-)」がこれほどに意味を変化させる例はない。明らかに、語根は  $\sqrt{maF}$  ( $>si\sqrt{maF-u}$ ) ではなく、閉塞、収縮、集中を表す  $\sqrt{sim}$  /  $\sqrt{sib}$  (締、結、標、占、絞、閉、縛、握) であると思われる ( $\sqrt{sim-aF-u}$ )。「しまふ」と「しまる」、「しめる」、「しぼる」、「しぼる」はすべてに共通する意味、内側から向かう、小さくなるといった動きがある。従って、「し」は語根の一部であり、「し(為)」( $si\sqrt{maF-u}$ でも、接頭辞「し-」( $si-\sqrt{maF-u}$ )でもないであろう。

しかし、 $\sqrt{sim-aF-u}$  の、 $-aF-u$  に、これが表すとされる反復、継続の意味があるかどうかはむずかしく、別の意味を表すことを考える必要がある。この語「しまふ」においては、物理的に閉めたり、絞ったり、占め ( $\sqrt{sim/b}$ ) たりするわけではないから、暫定的に、「抽象化」の意味を与える「ふ」と考えておくことにしたい。

#### 5 重複語としての「し」

重複形は古代の印欧語に広くみられ、反復、強調などのニュアンスなどを表していた<sup>7)</sup>。日本語にもそれは認められる(中村(1994))(ここで言う重複とは「かえすがえす」など、語全体の繰り返しではなく、語頭一音節だけの反復である： $\sqrt{saF-u}$  (障) $>sa-\sqrt{saF-u}$  (支、障))。

$\sqrt{sim}$ 、 $\sqrt{sib}$  が閉塞感を表す語根であることは前項4で述べたが、「しじまる (縮、鞏)」((c850))「伸びていたものが縮んで小さくなる」と「しまる (締、緊、閉)」((697))「しっかりと取り締まる」のペアはどうであろう

か。語根がサ行音で始まる語の場合、重複の「し-」なのか、接頭辞の「し-」なのか判断するのは非常に困難である。「しじまる」の「し」は後者の可能性もある。意味もあまり「しまる」から変化していない。蜂矢(1998:188-89)は、この語を重複語としながらも、「しじに」(繁)と同根と考えているが、「締まる」、「縛る」、「しばむ」から考えると、やはり語根は $\sqrt{\text{sim}}$ だと思われる： $\text{si-}\sqrt{\text{jim-a-ru}} < * \text{si-}\sqrt{\text{sim-a-ru}}$ 。

「しぎる」((c1711))、「ししぎる」((1722-1817))。前者は3.4に述べたが、「しきりに切る」の意味、頻度を高める接頭辞「し-」であった( $\text{si-}\sqrt{\text{gir-u}} < * \text{si-}\sqrt{\text{kir-u}}$ )。後者の重複動詞は「細かく切る」となり、重複によって、切るモード、様態が変えられている。

「ししこらかす」((c1001-1014))「病気を治療しそこなう」。「\*しこらかす」は存在しないが、「しこる」(「しそこなう、まちがえる」と同語源であるのは明らかだろう。前項3に述べた「商じこり」である。「やる」・「やらかす」、「散る」・「散らかす」、「たぶる」・「たぶらかす」などのペアと同じ構造で、接尾辞  $-\text{aka-s-u}$  はネガティブな意味になる。資料に残っていないだけで、「\*しこらかす」が口語で使われていた可能性はあると思われる。重複によって「ししこらかす」は、単なる失敗ではなく、失敗の対象が「病気の治療」とであるという「特殊化」の意味を得たと考えられる。

#### 【註】

- 1) 明らかに漢語である語は除外する：「始末」、「支度」などがそうである。後者、「度」の中国語祖語再建形は  $*\text{d}^{\text{ak}}\text{h}$  で、同語源にビルマ語文語  $\text{twak}$  「数字、計算」がある (Schuessler (2007: 218))。
- 2) 語根は  $\sqrt{\text{kuF}}$  だが、 $/\text{F}/$  と  $/\text{m}/$  は交替するので (阪倉 (1966: 235))、 $\sqrt{\text{kum}}$  組むと同語源となる可能性が強い。上代の「食ふ」は、食べるというよりは、「口にくわえる用例が多く、「食」の意にはハムが用いられた (『大辞典』)」とすれば、なおさら  $\sqrt{\text{kum}}$  と意味は近づいてくるであろう。そして、 $/\text{a}/$  と  $/\text{u}/$  (阪倉 (1966: 247-48))、 $/\text{F}/$  と  $/\text{k}/$  (同: 238) も交替するので、 $\sqrt{\text{kam}}$  (醸)、 $\sqrt{\text{Fam}}$  (嵌、填)、 $\sqrt{\text{kum}}$  (組)、 $\sqrt{\text{Fum}}$  (踏、踐) は一つの語根へ遡及

- しうると推測される(中村(1994:579-81)を参照)。
- 3) ta-√tam-u と分節され、√tam (搦、矯、揉)「まがる、たわめる、曲げる」の重複動詞である可能性もある。その場合は「反復」を表す重複であろう(中村(1994:575-76))。
- 4) 効果は利益とも似ているが、利益を表す重複動詞がある:√sur-u (磨、擦、摩、耗)、sa-√sur-u (摩、擦):中村(1994:574-75)。
- 5) 西洋語でも「幸運」にタイミングの良さを語源とするものがある。古典ギリシャ語 τυχεῖν «待つ、会う」と εὖ-「善く」から、εὐτυχής «幸福な」(Chantraine(1968-80:1142-43))。また、英語 happy<中期英語 happi は hap「偶然(の出来事)」+接尾辞である。hap は、古ノルド語 happ からの借用語で、印欧祖語 \*kob-「合う」に遡る(古アイルランド cob「勝利」、古スラヴ kobi「運命」)(寺澤(1997:619))。ロシア語 кобы «魔法、魔術」は別方向へ意味が変化しているが、セルボクロアチア語は kôb「吉祥」、古チェコ語は koba「成功」である(Vasmer(1976:584))。語形は酷似しているが、サンスクリット kâbavâs「魔物の名前」との関係は確かでない(Mayrhofer(1986-2001:338))。
- 6) 「しじかむ」は「しかむ」の重複動詞の可能性もあるけれども、非重複形の方が意味が弱く、より一般的なのは珍しい。同根に「しじく(鱧)»(1275)がある(si-zi-√k-u)。
- 7) 「(印欧)祖語において、重複 Reduplikation は概して、反復ないし強調のニュアンスと結びついてきたが、歴史時代に入ると、それは音節全体の重複動詞に限られ(例えば、サンスクリットでは強調になる)、語頭だけの重複では意味のニュアンスは感じ取れなくなっている」(Szemerényi(1990:288))。

#### 参考文献

- 阿蘇瑞枝(2010)『萬葉集全歌講義』(巻第十一・巻第十二)笠間書店。
- Buck, Carl Darling (1949) *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*, Chicago & London, University of Chicago Press.
- Chantraine, Pierre (1968-80) *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, Paris: Klincksieck.
- 蜂矢真郷(1998)『国語重複語の語構成論的研究』塙書房。
- 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店。
- 堀井令以知(1988)『語源大辞典』東京堂出版。
- 伊藤 博(1998)『萬葉集釋注』八 集英社。
- 上代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典 上代編』三省堂。
- 北原保夫他編(2000-2002)『日本国語大辞典』第二版 小学館。
- Mayrhofer, Manfred (1986-2001), *Etymologisches Wörterbuch des Alt-*

- indoarischen*, Heidelberg: Carl Winter.
- 中田祝夫他編 (1983) 『古語大辞典』小学館。
- 中村幸一 (1994) 「印欧語の視点による日本語の重複動詞の分析」『一橋論叢』第 111 巻、第 3 号、572-586。
- 中西 進 (1978-85) 『万葉集』講談社文庫。
- 沖森卓也 (2017) 『日本語全史』ちくま新書。
- 澤瀉久孝 (1960) 『萬葉集注釋』卷第七 中央公論社。
- (1966) 同 卷第十六 同。
- 大島正健 (1931) 『國語の語根とその分類』第一書房。
- Schuessler, Axel (2007), *ABC Etymological Dictionary of Old Chinese*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Szemerényi, Oswald (1970, 1990<sup>4</sup>) *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- 寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』研究社。
- Vasmer, Max (1976), *Russisches etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter: Heidelberg.

(なかむら・こういち 政治経済学部教授)



## Semantic Analysis of Word-Initial *Si*(-) in Japanese

NAKAMURA Koichi

### Abstract

Of the Japanese words beginning with *si* (-) (excluding borrowed words from Chinese), most are the continuative form (ren' yokei) of *su(ru)* (*si* √ *sir-u* 'to experience'). Some of these seem to have developed other significations and nuances such as intensity (*si* √ *suF-u* 'to put down safely'), generalization (*si* √ *ta-tam-u*), expectation (*si* √ *kak-u* 'to set up'), and specialization (*si* √ *oku-r-u* 'to send money'). Even if words begin with *si*, some of those *si* are not the continuative form but a homophonic prefix with a totally different meaning from that of *su(ru)*. They have meanings of specialization (*si*-√ *garam-u* < \**si*-√ *karam-u* 'to entangle'), downward/backward movement (*si*-√ *duk-u* < \**si*-√ *tuk-u* 'to be on the bottom of water'), negativity (*si*-√ *kam-u* 'to frown'), and repetition (*si*-√ *buk-u* 'to blow heavily'). In a very few words, *si* is neither the continuative form nor a prefix but the initial part of a root that incidentally begins with this sound (e.g. √ *sim-aF-u* 'to end', NOT \**si* √ *maF-u*), though it was traditionally thought otherwise. Lastly there are *si* that constitute the duplicated syllables of verbs whose roots begin with the same sound (e.g. *si*-√ *jim-a-ru* < \**si*-√ *sim-a-ru* 'to shrink').